

## 都市部の児童の動物飼育と自然体験活動

甲田菜穂子<sup>1</sup>・宝迪<sup>2</sup>・中嶋信<sup>2</sup>・渡辺元<sup>1</sup>・南里悦史<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>東京農工大学大学院農学研究院・<sup>2</sup>東京農工大学大学院連合農学研究科・<sup>3</sup>福岡県立大学人間社会学部)

### 【目的】

現在、児童の教育目標として、「生きる力」の育成が文部科学省で定められており、その育成方策の一つとして、青少年の自然体験・生活体験などの機会の増加が求められている。しかし、日本人の自然体験活動の機会は、時代と共に減少し、若い世代ほど、子ども時代の自然体験や友達との遊びも減少していることが報告されている。一方、自然体験活動の一環である動物飼育（本研究では、ペット飼育や動物の世話の総称とする）は、家庭内外において高い割合で行われており、いわゆる自然と日常的に関わる機会の少ない都市に在住する児童にとっては、かなり身近な体験になると考えられる。そこで本研究は、都市部の児童における動物飼育と他の自然体験活動の実態と、その関連について調査し、児童の発達における動物飼育の必要性を検討することを目的とした。

### 【方法】

東京都多摩地区の公立小学校に通う5、6年生、計434名（男児226名、女児208名）を対象に無記名の質問紙調査を実施した。各クラスの担任教諭が、授業中に質問紙を児童に配布し、回収した。質問項目は記述式と選択式があった。記述式では、児童が自分で世話したことのある動物の種類について回答させ、分析時に児童の世話経験のある動物の種類を恒温動物（50%）／変温動物のみ（35%）／なし（15%）の3種類に分類した。選択式では、家庭でのペット飼育経験の有無、経験したことのある自然体験13項目の頻度と、希望する自然体験13項目の程度について、それぞれ4段階評価（1-4点）で回答させた。なお、検定には2要因分散分析（性別×動物の種類）を用いた。

### 【結果と考察】

全体の78%もの児童に家庭でペットを飼育した経験があり、85%もの児童に動物を世話した経験があった。動物飼育経験者数には、性差は見いだせなかった。また全般に、児童の自然体験の頻度や意欲も比較的高かった。児童が経験した頻度が高かった自然体験は、「草や葉っぱを使って遊んだことがある」、「木登りをしたことがある」、「ごみのリサイクルをしている」、「自分で野菜を収穫して食べたことがある」、「カエルやオタマジャクシを捕まえたことがある」、「磁石を使って遊んだことがある」、「つららや霜柱を見たり触ったりしたことがある」といったものであった。つまり、児童は都会でも比較的行ないやすい体験を積極的に行なってきたと言える。一方、児童が希望する自然体験については、「大きな雪だるまや、かまくらを作りたい」、「雪の中でつららを採ったり雪合戦をして遊んでみたい」、「川や湖で大きな魚を釣ってみたい」といった10項目で、比較的、強く望まれており、「野原やお花畑で、草や花をいっぱいってみたい」、「木や草花の種類をいろいろ調べてみたい」、「落ち葉の下や土の中の生き物を観察したい」といった体験はそれ程、望まれていなかった。すなわち、児童は都会レベルの自然体験よりも、都市では体験しにくい自然体験に意欲的であった。

児童の自然体験にも性差が見られた。男児は、全身を使う活動的な自然体験や動物に関係する自然体験を女児より頻繁に経験し、かつそれらの自然体験をより意欲的に体験したいと望んでいた。一方、女児は、手先を使って草花などの植物に関わる自然体験を男児より頻繁に経験し、かつそれらの自然体験をより意欲的に体験したいと望んでいた。動物飼育経験と自然体験の関係では、動物飼育経験のある児童は、ない児童に比べ、より高頻度に自然体験をすると共に、自然体験に意欲的であった。つまり、動物飼育と自然体験はポジティブな関係にあった。また、変温動物のみの世話経験のある児童は、自然体験に対して特に意欲的であった。つまり、恒温動物の世話経験、主にイヌ・ネコなどの家庭内ペット飼育は、他の自然体験と基本的にはポジティブな関係にあるが、家庭の外に出て行なう自然体験に対する児童の意欲の上限を狭める要因になった可能性も考えられる。

以上から、都市部における動物飼育は、児童にとって身近で、性別に左右されない安定した自然体験の一部であると言える。動物飼育は、その他の自然体験ともプラスの関係があり、児童の自然体験の減少を防ぐ改善策の一つとして期待できる。さらなる調査や研究、実践を進めていくことが重要である。